

# 現代学生の友人関係に関する調査研究（2）

現代学生の自己不信と友人観

A Study of Students' Friendship (2)

角替 弘規

桐蔭横浜大学工学部

2005年9月15日 受理

## 1. はじめに

平成17年度学校基本調査<sup>1</sup>によれば、大学・短期大学進学率は51.5%にのぼり、史上初めて5割を突破した。大学進学率も44.2%と同じく過去最高の値を示している。さらに専門学校を含めた高等教育機関全体への進学率は76.2%であり、若者の約8割が中等教育終了後も何らかの形で教育・研究機関に所属していることを示している。一方、18歳人口をベースにした進学率ではなく、進学志願率と合格率の推移をベースとして高等教育の動向を見たときに、2010年代には本格的な大学の「冬の時代」が到来すると指摘する向きもある<sup>2</sup>。これは学生募集の面における多くの困難を意味するだけでなく、大学在学中における教育のあり方や方法、さらには大学そのものの意義などについて根本的な転換が求められる可能性が強いことも示している。このような状況において、どのような若者が学生として大学に入学しつつあるのか、彼らが何を考え、大学に何を期待し、どのような人間関係を取り結んでいるのかを把握しておくことは極めて重要であると思われる。伝統的な学生観だけでは捉え切れない「多様な学

生」が増加しつつあると指摘される中で、彼・彼女らを理解し適切な指導を施す上でこのような把握が必要とされていると考えるからである。

このような問題意識に基づいて、本研究は昨年に引き続き本学学生を対象に実施した「友人関係に関する調査」<sup>3</sup>の分析結果に基づき、現代学生の友人関係の実態を明らかにしようとしたものである。特に今回の調査においては、友人関係の実態把握だけでなく、学生の自己意識に着目し、いかなる自己意識がいかなる友人関係を導いているのかという点について考察した。学生の自己意識に注目したのは次のような理由による。

前回の調査で明らかになったのは、現代学生の友人との付き合い方における二つの軸であった<sup>4</sup>。ひとつは自分と友人の内面を共有することを志向する「内面共有性」であり、もうひとつは単に同じ経験を重ねることを志向する「経験共有性」である。やや単純化してまとめれば、「内面共有性」重視の付き合い方は友人と深くじっくり付き合う付き合い方を、「経験共有性」重視の付き合い方は単に一緒にいるだけの浅い付き合い方を意味する。そして、学生たちは友人と内面的な部分

Hiroki Tsunogae : Faculty of Engineering, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aobaku, Yokohama 225-8502

での深い付き合いを望みながらも、実際の行動はそれを伴わず、経験を共有するにとどまっている、すなわち、なかなか自己をさらけ出せない実態があるらしいことが垣間見えたのである。つまり表面上友人の数が多く、一見楽しい学生生活を送っているようでいて、実は自分自身で悩みや不安を抱え込んだままではいる学生が相当数存在するのではないかとと思われるのである。では、そのような付き合い方を導いてしまう各学生の内面・自己とは一体どのようなものであろうか。これが学生の自己意識に着目した一つめの理由である。二つめの理由は平成12年に文部科学省高等教育局が示したある報告書の中の一節にある。当局は現代学生の実態について次のような見解を示していた。やや長くなるが引用してみよう。

「最近のキャンパスは、様々なタイプの学生であふれている。しかし、将来の職業や具体的な学修内容について、明確な自覚を持っている学生は、以前と比べると減っているように思われる。むしろ、そのような自覚を持たないまま、いわば『自分探し』をするために大学に入学してくる学生が増えていると考えられる。～中略～今日の学生は、自由で豊かな時代を生きながら他者とのつながりを希薄化させ、心の悩みに遭遇するなど、新しい問題に直面していると言える」<sup>5</sup>。

つまり、当局は今後大学における学生指導に求められることとして「自分探し」学生への対応、そして様々な「心の悩み」への対処が重要であると主張している。そのような要請を前提としたときに、果たして大学は自己形成＝社会化機関として十分に対応できるものであろうか、という疑問を抱くと同時に、目の前にいる学生たちがどのように自分自身を認識しているのか調べてみる必要があると考えたのが、学生の自己意識に注目しようとした二つめの理由である。

大学における自己形成とは、初等・中等教育機関における自己形成とは大きく異なるはずである。入学生及び在學生は大学入学以前

に十数年間の学校教育を受け選抜されてくる中で、何らかの「自己」を形成しているはずだからである。そしてその「自己」を核として友人や教師といった他者との関わりを構築している。つまり大学における自己形成とは、赤ん坊のように全く何もない状態から自己を作り上げるというのではなく、ある程度形成された自己に働きかけることによって、将来に対するモチベーションを与えることだといえることができるだろう。

それでは、現代の学生は自己についてどのような認識を持っているのだろうか。そしてどのような人間関係を構築しているのだろうか。以下、アンケートの結果に基づいて、大学生の自己認識と友人関係のあり方について考察する。

## 2. 交友関係の実態

### (1) 回答者の概要

今回の調査における回答者の概要は次のとおりである。性別は男性が約70%、女性が約25%であり、男性が主体の回答となっている。学年については1年生が約30%、2年生が約40%、3年生以上が約25%で1,2年生が主体となっている。調査は筆者が担当する授業を利用して実施したため、法学部所属者が70%を占めた。

サークルの所属の有無について見ると、所属しているのは回答者の約3割、またアルバイトについては、アルバイトに従事する者が回答者の約6割であった。こうした傾向は前回の調査における回答者の傾向とほぼ変わらない。

### (2) 交友関係の実態

図表1は友人の数について尋ねた結果を人数ごとにまとめたものである。2004年において実施した調査においても同様の質問をしているので、比較のためにその結果もあわせて図示した。単純に昨年の調査と比較すれば、友人の数は10人以下という少数群と50人以

上という多数群に二極分化しつつある。仔細に観察すれば、およそ４割が友人数１０人以下という結果であり、友人数のピークは「６～１０人」にあることが分かる。一方で約２割が５０人以上の友人がいると回答し、１００人以上の友人がいるとする者が５％ほど存在する。友人がいないという回答は見受けられなかった。

「友人」という言葉で括る他者の存在を５０人以上と回答することは現代の大学生の他者認識を考察するに当たってきわめて興味深い現象である。「友人」という語を用いるときに、これまで暗黙の前提とされていた一定の他者との親密さが変容しつつあると考えられるからである。例えば我々は、単に携帯電話のメモリーに名前と電話番号が登録されているだけでその他者を「友人」として認識するだろうか？ 同じ授業に登録し、２、３語の言葉を交わした経験だけでその他者を「友人」と認識するだろうか？ 仮にこうした他者関係を「友人関係」の基準とするならば、それは友人関係の希薄化を示す一端としても見ることができるのではなかろうか。この点については今後さらに掘り下げて考えていきたいと思う。

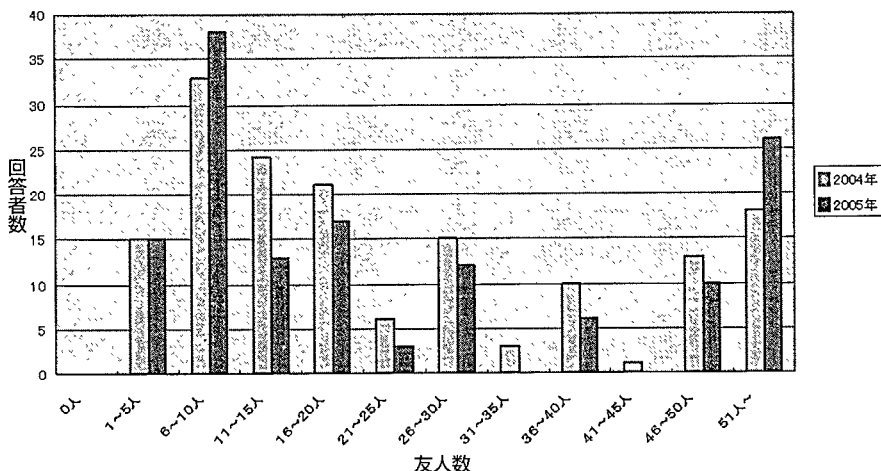
今日の社会生活を考える上でもはや欠かせないインフラとなりつつある携帯電話の所有については、所有者が９６．８％、非所有は２．５

％という結果であった。さらに携帯電話によるメールのやり取りをするかどうかについては９０．５％が「する」と回答していた。すなわち、ほとんどの学生が携帯電話を所有し、携帯電話を利用した電子メールのやり取りを行っているということになる。さらにその頻度については多いときで一日に１～２０回程度とする者が全体の７割弱を占めている（平均値２５．７回）。仮に１日の睡眠時間を６時間とし、起床している時間を１８時間とすれば、約１時間に１回という頻度でメールのやり取りを行っているということになる。

メールによって取り結ばれる他者との関係は表層的で希薄であるとの批判があるが、それは若者だけに指摘されることではなかろう。むしろ、これだけ普及した携帯電話をはじめとする電子媒体によって維持されるコミュニケーションの将来性と可能性を積極的に検討すべきであろう。無論その一方で、少数ながら携帯電話を所有しない者が存在することを忘れてはならない。大学の授業においても携帯電話を積極的に活用する事例も見受けられるようになってきたが、携帯メディアの所有／非所有によって受けるサービスに差が生じないような配慮が必要である。

それでは彼らは友人とどのようなことを話しているのだろうか。前回の調査においても特に中のよい友人と何を話しているのかを

図表１ 友人の人数（N＝１４０）



尋ねたが、今回の調査においてもまったく同じ質問項目を用意し、回答を得た。その結果を図表2に示す。

「よく話す」と「時々話す」話題として今回の調査で最も多かったのが「大学のことに」であった。一方、前回の調査において1位であった「自分たちの将来のことやこれからの人生について」は6位となっている。このように各項目では若干の順位の変動が見られるが、やはり主たる会話は映画やテレビのこと、趣味の話や、異性・恋愛のこと、あるいはファッションや音楽など、良く言えば「若者らしい」会話内容、悪く言えば表面的で奥行きのない「四方山話」に終始していることが窺われる。

### 3. 自己不信と友人観

自己意識とは友人をはじめとする他者との様々なかかわりの中で次第に形成されていくと考えられるが、いったん形成された自己はさらにその後に取り交わされる相互行為のあり方を規定しているともいえる。現在の自己意識が暫定的なものだとしても、それによって当面の他者との関係のあり方が規定されるとすれば、現段階で抱えている自己意識が一

連の社会化過程において重要な意味を持つてくることになる。

ここでは自己意識を代表するものとして、自分自身に対する自信に着目した。大学に入学するまでの十数年間において無数の選抜を経てきた大学生であるが、その選抜が頻繁に行なわれ、学校生活においても極めて大きな重要性を与えられているが故に単純に自己の持つ無限の可能性を信じ切っているとは思えない。仮にそのような楽天的な学生がいるとしても、その学生は常に選抜に勝ち続けてきたほんの一握りの「選良」に過ぎず、大多数の学生は何らかの「負い目」を刻み込んでいるのではなからうか。いわば選抜に負け続けてきたものとして、自分自身を信じるのができないという「自己不信性」があるように思われる。こうした自分に対する負のイメージが学習にせよ学生生活にせよ多大な影響を及ぼしているのではないかと思われる。そこで、以下においては自己不信をひとつの軸として、友人関係のあり方を探って生きたいと思う。

#### (1) 自己と社会への評価

今回の調査においては、「日頃の生活の中で次のようなことを考えたり感じたりするこ

図表2 特に仲のよい友人との会話内容（「よく話す」と「時々話す」の合計％）

順位	項 目	%	前回調査時 順位
1	大学のことに⑤(34.2)	86.7	4
2	映画やビデオ、テレビ番組のことに②(38.0)	79.1	2
3	趣味について③(37.3)	77.2	3
4	異性のことや恋愛のことに①(40.5)	76.6	5
5	その場にはいない他の友達について⑥(27.2)	75.0	9
6	自分たちの将来のことやこれからの人生について⑧(21.5)	72.8	1
7	ファッションや音楽、芸能人やアーティストのことに④(34.8)	70.9	7
8	就職のことや就職活動について⑦(23.4)	69.0	8
9	お互いの夢について⑩(16.5)	64.6	6
10	ショッピングや食事のことに⑨(21.5)	60.8	10
11	学問のことに⑩(19.6)	58.2	11
12	家族のことに③(13.3)	53.2	14
13	最近読んだ本(マンガ・雑誌は除く)のことに⑤(9.5)	46.2	13
14	プレステなどのテレビゲームについて⑪16.5	45.6	12
15	政治や経済のことに⑤(9.5)	41.8	16
16	この国や社会のあり方について⑭(10.8)	32.9	15

※○数字は「よく話す」のみの順位。( )内の数字はその％。

とがありますか」という質問として15個の項目を設定し、自分自身に対する評価や社会に対する評価を尋ね、「よくある」、「時々ある」、「あまりない」、「まったくない」の4件法によって回答を得た。この結果の単純集計を図表3に示す。

「ある」と回答した者の割合の多い順に見てみると、「自分のことは結局自分で解決しなければならない」と考える者が約9割いた。また「自分はダメな人間である」と自己に対して否定的な評価を下しているものが約8割いることが分かった。「大学を卒業してから社会に出て行くことに対して不安を感じる」者も約7割にのぼった。

しかしこのような否定的な捉え方だけではなく、「自分の努力はいつか必ず報われると思う」や「自分の夢は必ずかなうと思う」と考える者も半数以上存在することが分かる。また、「自分は誰からも必要とされていない」と感じる者は3割強にとどまっており、友達と一緒に過ごすことをうっとうしく感じる者も約3割しかいなかった。

以上のことを総合的に考えてみれば、自己に対する評価は低く、社会に対して漠然とした不満と不安を抱きつつも、友人や家族といった身近な他者に対しては大きな不満はなく、ある程度の自分自身の存在意義を見出し

ているようである。

## （２）自己不信尺度の作成

ではこれら一連の回答を背後で規定している軸にはどのようなものがあるのだろうか。そこで、図表4に示すように15個の質問項目について因子分析を施した。その結果、4つの因子が析出された。第1因子は「自分はダメな人間だと思う」、「大学を卒業してから社会に出て行くことに対して不安を感じる」、「自分は誰からも必要とされていないのだと感じる」、「結局要領よく立ち回ったものが有利だと思う」、「いくら努力しても報われないと思う」、「自分のことは結局自分で解決しなければならないと思う」、「他人は信用できないと思う」といった項目の因子負荷量が高くなっている。これらの項目に共通するのは不信という要素、特に自分自身に対する不信であると考えられることから、この因子を「自己不信性因子」と名づけることとした。

第2因子は「家族に対する不満を感じる」、「友人に対して不満を感じる」、「大学や教師に対して不満を感じる」、「社会に対して不満を感じる」、「他人は信用できない」といった項目の因子負荷量が高い。このことからこの因子は「不満性因子」とすることができる。

第3因子は「自分の努力はいつか必ず報わ

図表3 日頃の生活の中で次のようなことを考えたり感じたりすることがあるか？（％）

	ある	ない
自分のことは結局自分で解決しなければならないと思う	88.6	10.8
自分はダメな人間だと思う	79.1	20.9
結局要領よく立ち回った者が有利だと思う	77.9	22.1
社会に対して不満を感じる	71.6	28.5
大学を卒業してから社会に出て行くことに対して不安を感じる	70.9	29.1
自分の努力はいつか必ず報われると思う	68.3	31.6
自分の夢は必ずかなうと思う	53.2	46.9
大学や教師に対して不満を感じる	50.6	49.3
早く大学を卒業して社会で活躍したいと思う	47.5	52.5
他人は信用できないと思う	44.9	55.1
いくら努力しても報われないと思う	43.1	56.3
友人に対して不満を感じる	39.3	60.8
家族に対して不満を感じる	38.0	62.1
自分は誰からも必要とされていないのだと感じる	36.7	63.3
友達いることがとてもうっとうしく感じる	30.4	69.6

「ある」は「よくある」と「時々ある」の合計、「ない」は「あまりない」と「まったくない」の合計

れると思う」、「自分の夢は必ずかなうと思う」、「早く大学を卒業して社会で活躍したいと思う」という項目の因子負荷量が高い。このことから「積極性因子」とすることができよう。第4因子は「友だちといることがとてもうとうしく感じる」、「他人は信用できないと思う」といった項目の因子負荷量が高く、「孤立性因子」とすることができる。

これらの因子の中で特に高い固有値と寄与率を示した「自己不信性因子」に着目し、ここから自己不信尺度を作成することとした。まず先に因子分析を行なった15項目のそれぞれの回答を点数化し<sup>6</sup>、先の因子分析の結果算出された各項目についての因子負荷量を各項目の得点に乗じた。これによって自己不信の度合いに応じた相対的な尺度としての自己不信得点が算出される。そして自己不信得点の高低による分析を行なうために、操作的に低得点群 (N=50)、中得点群 (N=52)、高得点群 (N=54) の3つの得点群にグループ分けを行なった。以下の分析はこのグループ分けに基づいて行なっている。

### (3) 自己不信度と友人観

では、自分自身についての自分自身の捉え方が他者との係わり合いにどのような違いを与えているのだろうか。特に自分自身につい

ての自信の持ち方が友人関係においてどのような違いをもたらしているのかをここでは考えてみたい。

まず、友人の数ではどうだろうか。友人数が10人以下を「少」、11人から30人未満を「中」、それ以上を「多」としてまとめあげ、得点群ごとに比較してみたが、友人の多寡と自己不信度の高低には相関は見られなかった。つまり、友人が少ないからといってその人は自分に自信のない人だとは言い得ない。逆に友人の数が多からといってその人が自信に満ちた者であるとも言い得ないのである。

そこで友人との付き合い方についての考え方を尋ねた質問項目の結果とクロスさせることで、自己についての見方と友人との考え方の関係を探ってみることとした。その結果を図表5に示す。

まず注目したいのは、「できるだけ多くの人と友だちになりたいと思う」、「友達とはいつも一緒にいたいと思う」という2項目である。前者については低得点群、高得点群いずれにおいても半数以上が、後者についてはいずれの群においても4割程度の者が肯定的回答を示している。すなわち自信の程度に関わらず、友人には接していたいと考えているのだと言えよう。

図表4 因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
自分はダメな人間だと思う	0.708	0.166	-0.184	0.115
大学を卒業してから社会に出て行くことに対して不安を感じる	0.558	0.099	-0.185	0.095
自分は誰からも必要とされていないのだと感じる	0.547	0.155	-0.137	0.262
結局要領よく立ち回ったものが有利だと思う	0.538	0.189	-0.064	-0.049
いくら努力しても報われないと思う	0.377	0.305	-0.277	0.181
自分のことは結局自分で解決しなければならないと思う	0.306	0.003	0.266	0.224
家族に対して不満を感じる	0.060	0.635	-0.087	0.196
友人に対して不満を感じる	0.120	0.628	-0.135	0.375
大学や教師に対して不満を感じる	0.210	0.586	-0.118	0.118
社会に対して不満を感じる	0.197	0.569	0.130	-0.077
自分の努力はいつか必ず報われると思う	-0.127	-0.089	0.860	-0.163
自分の夢は必ずかなうと思う	-0.223	-0.309	0.623	-0.070
早く大学を卒業して社会で活躍したいと思う	-0.176	0.126	0.293	0.037
友達といることがとてもうとうしく感じる	0.075	0.130	-0.049	0.602
他人は信用できないと思う	0.354	0.316	-0.067	0.436
固 有 値	4.321	1.650	1.443	1.132
寄 与 率 (%)	28.8%	11.0%	9.6%	7.5%

主因子法／バリマックス回転

自分に対する自信が相対的に高いと思われる低得点群の肯定的回答の割合が他の得点群よりも高くなっているのは、上記2項目に加えて、「友達なら、私の考えや意見をすべて受け止めてくれると思う」と「友達のアドバイスは常に正しいと思う」の2項目であった。また「友だちなら喜びや悲しみを分かち合えると思う」についても、高得点群と比較した時に肯定的回答の占める割合が多かった。これらの項目はいずれも友人を信頼できる相手として捉えていることを示す項目である。自分を信じることができるのであれば同様に友人である他者を信じることができるということを示しているように思われる。

その一方で、自信が相対的に低いと考えられる高得点群についてみると、「孤独不安」と言い得るようなメンタリティが浮かび上がる。例えば「一人でいるととても不安になる」という項目では低得点群の16%が「当てはまる」と回答しているのに対して、高得点群ではその割合は約3倍の48.1%にも達している。「友達が自分に話しかけてきたり相手にしてくれたりすると嬉しい」についても高得点群では77.8%とほぼ8割の者が「当てはまる」と回答している。つまり、友人がおらず孤独な状態に置かれることに対しての不安がかなり強いのではないかとと思われるので

ある。このことは「自分の友達が他の人と話しているのを見ると寂しくなる」（低得点群18.0%：高得点群37.1%）を見ても分かる。確かに友人が少ない、あるいはまったくいない状況のまま大学生活を送るということあまり好ましいことではなかろう。まして、自分自身に対する自信がなければなおさらのこと孤独に対する不安はあって当然だと言うことができる。

そして「友達が自分のことをどんな風に考えているのか気になる」という項目についての結果（低得点群42.0%：高得点群70.4%）を見ると、自分自身への信頼感の根拠が自分が何を成し遂げたのかということよりも、自分自身が他人からどう見えているのかという基準に基づいているようにも思われる。他者との相対的な位置関係からしか自己を定義できないとなれば、自分自身についての信頼の根拠が他者にあることになる。自信の根拠が他者にあるとすれば他者との関係はより多彩かつより深い方が適切な根拠や基準として作用するだろう。

しかし自分に対する自信が弱く、かつ孤独に対する不安があり、友人にどう思われているか気になるから、それらを補うために友人との交流を積極的に求めているのかというと、そうではないらしい。例えば「一人でい

図表5 自己不信感と友人関観（「とても当てはまる」と「まあ当てはまる」の%）

	低得点群 (N=50)	中得点群 (N=52)	高得点群 (N=54)
できるだけ多くの人と友達になりたいと思う	56.0	55.7	51.9
友達とはいつも一緒にいたいと思う	40.0	26.9	35.2
友達と一緒にいるだけで安心する	28.0	44.1	37.0
友達なら、私の考えや意見をすべて受け止めてくれると思う	24.0	19.2	11.2
友達のアドバイスは常に正しいと思う	14.0	11.5	7.4
友達なら喜びや悲しみを分かち合えると思う	56.0	61.6	38.9
一人でいるととても不安になる	16.0	17.3	48.1
友達が自分に話しかけてきたり相手にしてくれたりすると嬉しい	56.0	82.7	77.8
自分の友達が他の人と話しているのを見ると寂しくなる	18.0	26.9	37.1
友達が自分のことをどんなふうに考えているのか気になる	42.0	61.6	70.4
一人でいる方が気が楽だ	24.0	48.0	48.2
他人と直接顔を見ながら話をするのは苦手だ	10.0	17.3	48.1
どのようにしたら友達ができるのか、よく分からない	10.0	21.1	42.6
その場の「ノリ」を壊さないように気をつけている	38.0	61.5	57.4
時と場所によって付き合う友達を変えている	36.0	34.6	53.7
友達の中で自分だけ浮かないように気をつけている	24.0	44.2	37.0
たとえ友達でも相手の心を傷つけるのはいけないことだ	68.0	65.3	83.3

る方が気が楽だ」という項目においては高得点群の48.2%が「当てはまる」と回答している（低得点群では24.0%）。また、「他人と直接顔を見ながら話をするのは苦手である」や「どのようにしたら友達ができるのか、よく分からない」という項目についても他の得点群よりも高得点群の方が肯定者の割合が高くなっている。一人でいるととても不安になるにもかかわらず、一人でいた方が気楽だと感じる。できるだけ多くの人と友達になりたいと思っているにもかかわらず、一人でいた方が気が楽だと考える。孤独への不安を抱きながら、孤独であることの居心地のよさに浸っている現代的な若者の姿がここに垣間見ることができるだろう。このことは「その場の『ノリ』を壊さないように気をつけている」や「時と場所によって付き合う友達を変えている」という回答によっても裏付けられる。

すなわち、自己に対する自信がないほど孤独に対する不安を抱えながらも、結局は一人であることを好んでいるのである。それは単純に友達の作り方がよく分からないからというところに原因を求めることもできるかもしれない。「どのようにしたら友達ができるのかよく分からない」に対する回答は低得点群が10%に過ぎないのに対して高得点群では4倍以上の42.6%にのぼっているからである。しかしその一方で、それは他者と関係を取り結ぶための何らかの対人スキルの取得云々の問題ではなく、現代の若者の特徴とされる「殻の固さ」あるいは「閉じこもり傾向」を示しているようにも読み取れる。つまり、他者と関わることで、他者が自己に対して何らかの介入をしてくることについての防衛ではないかと考えられるのではないかということである。

例えば「たとえ友達でも相手の心を傷つけるのはいけないことだ」という質問項目に対して低得点群の68%が肯定的回答をしているのに対して、高得点群では83%が肯定的回答を示している。その差は僅かではあるものの、他者への深い介入に対しての強い警戒

感や自己への他者からの深い介入への警戒感の裏返しと見ることはできないだろうか。「時と場所によって付き合う友達を変えている」のも高得点群の肯定的回答の割合が高くなっていることから以上のような説明ができそうである。時と場所によって付き合う相手を変えることで、様々な自己を見せ、深い付き合いを避けているのではないかと推測することも不可能ではない。今回は、このような傾向を明確に判断するだけの材料を得ることができなかったが、自己不信の度合いに応じて友人に対する考え方や付き合い方に何らかの相違があることが明らかとなった。

以上のことから次のようにまとめることができるだろう。

- ①学生は自己不信の度合いの強弱に関わらず、より多くの友人を持つことが望ましいと考えている。
- ②自己不信の度合いの弱い方が友人をより信頼する傾向にある。
- ③自己不信の度合いの強い方が孤立することに対して不安を抱く。また友人に対して自分がどのように映るのかを気にする。
- ④自己不信の度合いが強いほどより一人でいることを好み、より表層的な友人関係を取り結ぼうとする傾向にあると推察できる。

#### 4. 大学における「自分探し」の可能性 ～大学には何ができるのか～

今回の調査の分析を通じて明らかになったのは自分に対する自信があればそれだけ他者への信頼感も増し、友人と深く付き合うことができる傾向にあることである。逆に自分自身への自信が弱ければ、仮に多くの友達を持っていたとしても必ずしも深い付き合いが展開されているわけではなさそうであることが浮かび上がる。常に携帯電話で友人とメールのやり取りをし、様々な場所で友人たちと群れ遊び、活発な交友を行なっているように見える若者であっても、実はその内面はきわめて孤独で、その孤独に対する不安から、単に物理的に誰かとそこにいるだけという状態に



過ぎない可能性がある。それは自分自身に対する自信のなさの表出とも言えるだろう。

自分を信じることが、良好な他者関係、良好な友人関係の基礎となり、そのことにさらに良好な学習へとつながっていく可能性が秘められているとするならば、自分についての自信をいかに高めていくかということが、大学における「自分探し」のひとつの課題となるだろう。では大学には学生の「自分探し」として何が彼・彼女たちに何が提供できるだろうか。それは、学生の心のケアをする相談室を充実させることであるかもしれないし、就職支援の強化であるかもしれない。あるいは部活動を活発にすることであるかもしれないし、ロビーやラウンジの充実といったアメニティの向上であるかもしれない。しかしそういったことで学生の自己意識が向上し、自分自身に対する自信が増すのであれば、それらのほとんどは大学でなくても可能なことではなかろうか。大学でなければできないこと、世の中の他の機関においては得られない経験というものがあってこそ、大学における「自分探し」を意義あるものとして世に主張できると思われる。

そのように考えるならば、大学における「自分探し」が可能な第一の場、そして唯一の場はやはり授業であろう。授業を通して様々な知見を学ぶことによって、それまでの自分自身を見つめなおし、新たな自己を発見するとともに将来に対する展望を開くことは、まさに「自分探し」そのものであると思われる。また講義・ゼミナール・実験・演習など様々な学習形態を通じ様々な経験を共有することによって新たな友人ができることもあるだろうし、さらにそこからさまざまな交流が生じる可能性も秘めている。そのようなことから「自分探しの場」として授業を位置づけることも今後の大学における教育のあり方を模索する上でひとつの方向性を示すものと考えられる。

しかし、特に今回の調査対象者は学習面における自信はそれほど強くなく、また大学卒

業後の進路についての不安もかなり強く存在することが図表6としてまとめた自由回答記述から窺うことができる。そしてこれらの自由回答記述を読んでも、自分自身への自信のなさだけでなく、今学んでいる内容についての不安、将来何をすべきか分からないということについての不安も訴えられている。

特にこれらの回答の中で注目したいのは、「授業についていけない。他の大学生と自分の差はどのくらい？」(13)、「皆が頭が良いから、私が一緒にいて良いか迷う」(24)、「みんながどれくらい勉強しているのか」(59)、「大学にもっと仲間がいればもっと楽しく授業がこなせると思う」(76)、「周りの人が自分より法律の知識について詳しいと思えることがよくあり、自分だけが知らないと不安になる」(86)といった回答である（括弧内の数字は図表6中の整理番号）。これらの回答者は自らのあり方を他者との比較において定位しようとしているように見受けられる。

つまりそれぞれの不信や不安の要素は、互に関連していて、それらが学習への取り組みを規定し、さらにそれらがもたらす学習への取り組み方や成果がさらに不信や不安を強化する可能性がある。学生の基礎学力の低下が指摘されるようになって久しく、事実、学力の低下は著しいが、学力低下以上に深刻なのは意欲の低下であり、自信の喪失である。彼／彼女たちはこれまでの学校における選抜を通じて、自信を失い、意欲を低下させている。意欲の低下は自信の喪失を導き、さらにそれが意欲の低下を引き起こしている。今ここで取り上げた自由回答記述の例は、学生自らが友人との対比において、自らを劣った者へと貶めていこうとする、まさにそのプロセスを描き出していると言えないだろうか。この負の連鎖を何らかの形で断ち切り、より積極的な姿勢を呼び戻すための取り組みが求められる。その最も基礎的な部分において、良好な友人関係の構築、信頼しあえてなんでも相談できる仲間を作り出すことが必要ではな

かろうか。若者の社会性の低下が叫ばれる昨今、放っておいても学生は友人を作るだろうという楽観はあまり期待できない。あるいはそこに大学が積極的に介入しなければならないのかもしれない<sup>7</sup>。

また、入学者選抜の段階（特に面接を重視した選抜）においても自分自身への自信の有無が入学希望者を吟味する上での大きな判断基準となりうる。もっとも「自信」と一口に言ってもその内実は様々であろう。また若者の「自信」のあり方の背後には社会階層との関連が潜んでいることも指摘されているため<sup>8</sup>、若者の自己意識をさらに掘り下げて分析する必要があり、これについては今後の検討課題としておきたい。

よくある」を1点、「時々ある」を2点、「あまりない」を3点、「まったくない」を4点として計算した。

- 7 大学がその教育機能を果たすために、学生のどの部分にまで介入すべきであるのかを考える上で、田中毎実、「大学の学校化 大学教育改革の行方と教育理論」（藤田英典他編『教育学年報 9 大学改革』、世織書房、2002年）の指摘はきわめて示唆に富む。
- 8 荻谷剛彦、『階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ』、有信堂、2001年、207頁。

- 1 平成17年8月、文部科学省生涯学習局調査企画課、速報による値。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04073001/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04073001/001.htm)
- 2 岩内亮一、『私大改革の条件を問う』、学文社、2002年、127-128頁。
- 3 調査実施の概要は次のとおりである。  
調査実施年月日：2005年1月18日及び19日。  
集合調査による。  
調査対象：桐蔭横浜大学法学部及び工学部所属の学生で「教育学Ⅱ」「社会学Ⅱ」（いずれも一般教育科目）、「教育制度論」（教職課程科目）の受講者161名。  
配布161票、回収161票（回収率100.0%）  
有効票数158。無効票数3。（有効回答率98.1%）
- 4 角替弘規、「現代学生の友人関係に関する調査研究（1）」『桐蔭論叢』第11号、桐蔭横浜大学、2004年6月、90-93頁。
- 5 文部省高等教育局、大学における学生生活の充実に関する調査研究会『大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学作りを目指して－』、平成12年6月14日、2頁。
- 6 「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「まったくない」に1点を与えた。質問内容に対する回答の意味が逆転する3項目「早く大学を卒業して社会で活躍したいと思う」「自分の努力はいつか必ず報われると思う」「自分の夢は必ずかなうと思う」の3項目については「

図表5 「大学での勉強について、あなたは今、どんな不安や悩みあるいは不満を抱えていますか？」への自由回答記述（同様の表記の回答は割愛し、個人が特定可能な回答については一部修正した）

1	勉強をする気になれない。これから先、今学んでいることは生きてくるのか。
2	ついていけないのか。理解できているのか。単位取れるのか
3	単位のことが不安です。（同様の表記 他5件）
4	数学系がついていけないので将来のことを考えると不安になる
5	具体的な目標（職業）が決まっていないので、今一危機感がない。
6	この大学で勉強していることが自分が理想としている職業との関連性が全然ないのではないかと考えはじめ
7	役に立つのが少ない。教授は生徒のことを思っていないかと思いついたことがたびたびある。そんな中、単位をとらなければと焦る気持ちと教授や講義の不満、葛藤の中やっている。
8	大学での勉強がホントに社会の役にたつのか不安である。自分でも大学の勉強以外にスキルアップするための勉強、ノウハウを身につけなくてはいけないと思う。
9	単位取得ができるか不安である。大学の勉強が身につけていないような気がする。
10	時間が足りない。十分に試験対策ができない。点の取れない苦しみ。
11	進路について、どのように勉強したらよいのか？また、今のうちにどのような経験をつむべきか？
12	社会に出て行くときに大学でやっている勉強は役に立つのか悩む。
13	授業についていけない。他の大学生と自分の差はどのくらい？授業をこなすだけでいいのか？
14	ちゃんと卒業できるか心配である。
15	卒論がない大学なので、大学院の進学の際にどうしようかと思っている。
16	とにかく遅刻が多く、朝が苦手です。そのせいで単位不足におちいっています。やればできると言われるので、とにかく自分自身でこの時を乗り越えたい！
17	自分に合った道なのかどうか考えることがある。
18	単位が不安だ。このままだと4年次にもいくらか時を費やしてしまう。
19	大学に入学して勉強面で思うことは高校までの「暗記」中心の学習では手も足も出ない。「よく遊び、よく学べ」という格言があるがなるほどと思う。よくを「量」と「質」でとる場合が考えられるが、この場合
20	健康に続けられるか不安です。
21	ちゃんとしたいのにできない自分にイラつく。どうして決められたことをきちんとできないのか自分でもわ
22	大学の勉強だけでは司法試験に対応できないので、もっと特別クラスや自習室などを積極的に設置してほしい
23	高校までと違い受験とかがないので目標が立てづらい。わからなくなると混乱する。
24	皆が頭良いから、私が一緒にいて良いか迷う。社会に出たらやっていけなさそう。
25	不満といったら「ノートかして」と言われること。突然出てきて、それはないんじゃない？！と思う。こっちはちゃんと授業で勉強してる（といえるかどうかわからないけどに！質す私も私だけど・・・。
26	これから先、難しくなって勉強についていけなくなると不安です。
27	自分の勉強したい分野がない。
28	自分が悪いのだが、留年しそうである。今は真面目に学校に来ている。
29	私は留学生として言葉の壁があると思います。日本人の学生と友達たくさんなりたいたいですなかなかうまく
30	授業を受けてわからない勉強は以前なら相談できたけど、大学は人それぞれ科目が違うからわかってもらえ
31	自分がどのような道に進みたいのかははっきりせず、どのような勉強に力を入れていくべきかわからず不安を
32	単位をしっかりと取れるかどうか。
33	レポート課題が多く、寝る時間が少ない
34	あまり勉強を真面目にやらなかったのが将来が不安
35	大学の勉強が社会人になって全く使い物にならない気がして仕方ないです。
36	進学したい人たちはもっと特別授業などをすると良い
38	興味はわく授業とそうでない授業の差が激しい
39	勉強についていけなくなるのが不安です
40	ついていけない / むずかしい
42	今のままの勉強で自分のやりたい仕事ができるか？
43	最近勉強についていけないところ
44	わかりやすい授業とわかりにくい授業がある
45	将来役に立つか
47	テスト一発の授業がいや
48	勉強があまり理解できなかったとき
49	進路、特に進学や就職の面で。このまま勉強を続けて果たしてきちんと社会で出れるのか？
50	今勉強していること（法律関係）などを将来役立てたいと思っているので、それを本当に実現できるかどうかということ考えると少し不安になります。
51	何を何のために勉強しているのかわからなくなる
52	がんばったのに単位が取れなかったらという不安
53	テストが嫌い。テスト以外の評価してほしい

54	今の教育制度、方針などおかしいと思う。
55	自分がこの大学を選んで正解かどうか分からない。また最近、大学の勉強が全く面白く感じなくなった。専門教科での法律科目ですら楽しく感じない。自分には法律の勉強があっていないと感じている。自分には
56	将来この大学に出て、こういう勉強をしたことでどのような仕事につけるか
57	勉強についていけないときがある。無事に卒業できるかどうか
58	社会に出るとき、出ようとする場合において今まで学んだことが本当に役立つかどうか
59	皆がどれくらい勉強しているのか
60	卒業できるかどうか。就職できるかどうか？暗記力集中力に欠けているところ
61	ついていけないのが心配。みんながどれだけやってて自分はどれくらい遅れているか心配。
62	本当に自分の役に立つのか疑問です。自分がなにしたいのかわからない
63	嫌なことを努力することが嫌いなので成績がよくないのが悩みです。
64	プレゼンテーションでうまく発表できるか
65	将来全然役に立たない気がとてもする。
66	もともと法律に興味があって法学部にきたわけではなく別にやりたいことがあったので色々不安や不満はある。それでも大学在学中に専門的な資格をとりたいと思っています。
67	将来自分がやりたいことと大学の内容の違い。両立
68	とりえず勉強にはついていけているので特にはないです。
69	どのようにして自分の身につけるのか、勉強方法がよく分からない。授業を受けても理解できているのか疑問
70	関心を持つ授業についてはよく友達と勉強をし、討論なども常にするが、全く関心のない授業はただ単位ののためにテスト受けるから、一言、勉強を自由に選べる大学で好き嫌い激しくなってきた。
71	大学で勉強をがんばっても就職のときや企業に就職した後、あまり役立たず、ほとんどが無駄になってしまうようで大学の勉強をなぜ努力してがんばっているのか？その意義が分からなくなることがある。
72	勉強しなきゃいけない時期になるとやりたくなくなる
73	通学に時間がかかりすぎる
74	単位が少なく4年で卒業できるか不安
75	現在4年生で少し単位が残っているので単位が取れるか心配
76	大学にもっと仲間がいればもっと楽しく授業がこなせると思う
78	履修の際卒業に必要なギリギリの単位しかとらなかったで卒業できるか心配になる
80	大学での勉強が苦しいですが、頑張らなければならないと思う。
81	大学でみんなと一緒に勉強するのが楽しいことだと思います。勉強は自分自身にとっていろいろな知識が分
82	・先生の要求 ・何しているのか分からない
83	実際社会に出て働けるか不安である。(実践力が身につく授業がなされている授業なのか不安である) 国家試験が受かるか不安である
84	このまま大学に通っているだけで将来目指しているものに本当になれるのかどうか不安。同じ大学の人は全然勉強しているように見えないが、他の大学の人や専門学校の方は社会へ出て行ける状態になっているよう
85	将来の事を考えずただ、だらだらやってきたのでとても不安です。できるだけ早く将来なりたい仕事を見つけないと焦っているのも事実です。今まで結構いろんなものから逃げていたせいなのかともよく思います。
86	周りの人が自分より法律の知識について詳しいと思えることがよくあり、自分だけが知らない不安になる
87	単純な問題なら単位が取得できるか。少し深く考えると自分の将来のためになる教科はどれか？です。あとはアルバイトをしたいけれど両立できるのか
88	単位が足りるかどうかな 卒業できるかどうか
89	法律教科は暗記なので少しキツイです
90	学校で勉強になったと思うけどまだまだ足りないと思う。もうすぐ社会人になるけどこの準備はこの四年間の勉強を通してまた自信がないんです。
91	将来、資格が取れなければ役に立たないのでは